岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

11. 脊髄クモ膜嚢腫を伴った周期性四肢麻痺の1例(第47回岐阜臨床神経集談会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伏見, 一成, 細江, 英夫, 橋本, 孝治, 吉田, 実, 児玉, 博隆, 清水, 克時, 小久保, 桂明, 勝田, 純 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12443

全かつ有効な術式であると思われた。（症候性）側わん症を合併した５例において，脊柱カーブはその角度，様式ともに多彩であったが，術後の経過は，脊柱カーブの進行が見られる例，変化しない例，カーブが減少する例など多彩であった。本術式の側わん症への影響については，今後症例を増やし，長い経過観察期間で調査する必要がある。

10．上部胸椎疾患に対し胸骨縦割進入による前方除圧固定術を施行した３例

岐阜大・医　整形外科
川井　豪，宮本　敬，児玉博隆，川口敦司，
細江英夫，清水克時
岐阜赤十字病院
栄枝裕文
豊郷病院　整形外科
尾下佳史

【目的】1997年以降，上部胸椎に脊髄圧迫性病変を有する３例（上位胸椎後縦靱帯骨化症：２，上位胸椎椎間板ヘルニア：１例）に対し胸骨縦割進入前方除圧術を施行した。その成績及び問題点等について報告する。

【対象及び方法】症例は上位胸椎後縦靱帯骨化症の２例（54歳女性，骨化範囲：C７～Th１・Th２/３）（64歳女性，骨化範囲：C４・５・６Th１～３）及び上位胸椎椎間板ヘルニアの１例（50歳女性，Th２/３）である。術後経過観察期間は平均37ケ月（８～66ケ月）であった。胸骨はCauchoixによる原法と同様に剣状突起部より上端まで切離し，症例によっては血管鞘の剥離，適切なレトラクターの使用を行った。

【結果及び結論】１例において，術中合併症として１例に硬膜外静脈叢からの大量出血を，術後合併症として１例に反回神経の不全麻痺を経験した。全例において神経学的な術後経過は良好であった。本法を施行するにあたり手術手技の習熟が要求され，細心の注意も必要であると考える。

11．脊髄クモ膜嚢腫を伴った周期性四肢麻痺の１例

岐阜大・医　整形外科
伏見一成，細江英夫，橋本孝治，吉田　実，
児玉博孝，宮本敬，清水克時
同第３内科
小久保佳明，勝田　純

症例：19歳女性，妊娠８ケ月の妊婦

以前からシンナーの常用者であり，また偏食が激しかった。

平成14年１月，誘引なく両下肢の脱力を自覚し徐々に症状が増悪した。発症して２日目に両下肢麻痺のため起立困難となり来院した。両下肢の近位筋を中心に筋力低下を認め，両上腕，右下肢の近位筋に著明な圧痛を認めた。

同日撮影したMRIにてTh６～Th11に至る脊髄クモ膜嚢腫を認めた。血液所見にて，K：1.5mEq/lと著明な低カリウム血症を認めたため，持続輸液にてカリウムの補正を行った。血中カリウムが改善するとともに症状は著明に改善した。現在四肢の筋力は正常であり，脊髄クモ膜嚢腫については経過観察中である。